

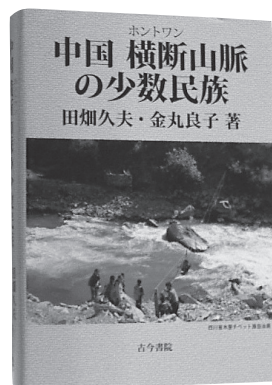
# 新刊紹介

田畑久夫・金丸良子著

『中国<sup>ホントワン</sup>横断山脈の少数民族』

大谷津 早苗

中国は古代から熟知されていた。しかし、国土が広大などの理由から全域にわたっての知識をもつ人々は、中国を専門としている研究者を含めてどれほど存在するだろうか。筆者は多くないと推定している。本書の横断山脈は、一部の登山家を除くと、テラ・インコグニタ (Terra Incognita、未知の土地) なのである。横断山脈の主峰の一つ梅里雪山 (六七四〇メートル) で二十数年前に日本人登山者十一名が亡くなったが、未だに一名の遺体が発見されず調査中であることも一部にしか知られていない。とりわけ同山脈の南麓山岳地帯に分布・居住する人々に関しては、この地域を通過した探検家の記録・報告書以外類書が存在しない。このような意味で本書は大変貴重な著作といえる。著者を紹介しておく。田畑久夫氏は本学大学院教授 (現在名誉教授) で、文化地理学、民俗学を専攻している。共著者の金丸良子氏は麗澤大学客



2017年7月1日発行  
古今書院  
A5判 464頁  
定価 本体8500円+税

員教授で、中国民俗学、中国民族学を専門領域としている。両氏には、西南中国に居住する少数民族などに関する翻訳を含む著作・論文が多数存在する。

本書はこれらの業績の延長線上に位置付けられる。十数年間継続してフィールドサーヴェイを実施し入手した資料を中心に、関連する漢籍史料をも参照して作成した論稿を主体に纏めた労作である。調査は二〇〇〇年ごろに開始され、二〇〇五年に少数民族など農民に課されていた農業税が全廃された時期以降にわたる。その農業税が全廃された結果、農業戸籍をもつ農民でも居住する村落から離れて都会などに自由に移動することができるようになった。そのため多数の人々が職を求めて村外に転出した。つまり、少数民族を含む村落社会は大転換期を迎え、人口流出や貨幣経済の浸透などにみられる如く、伝統的な生活様式に

著しい変化が生じたのである。本書におけるフィールドサーヴェイの時期は、正にこの大転換期であった。このような意味からも注目すべき著作といえよう。

本書の主な構成は以下になっている。

序論 (田畑)

第I篇 研究対象地域と少数民族の性格

第1章 研究対象地域の性格

第2章 少数民族の性格 (田畑、第3節のみ金丸)

第II篇 生業形態の比較 (田畑)

第2章 生業形態の比較

第3章 雲南チベット族の牧畜業 (金丸)

第4章 ナシ族の塩づくり (金丸)

第5章 雲南チベット族の木地製作 (田畑)

第6章 イ族の木地製作 (田畑)

付論I ナシ族の家族構成の特徴

— 四川省・俄亜ナシ族を中心に —

付論II 雲貴高原中部のイ族 (金丸)

— 生業形態を中心に —

付論III 雲貴高原中部のイ族 (田畑)

序論では、研究目的、研究方法および先行研究が具体的・詳細に論じられている。その中でも、

調査対象地域が外国人研究者を含め外国人の立入が厳禁された対外「未開放地区」であったことから、フィールドワークではなく、著者らが主張するフィールドサーヴェイによる手段が最適である点は共感できるし、注目すべき点といえる。また、本書より百年ほど前の鳥居龍藏やデーヴィスの調査内容を比較検討し、それらの資料としての価値を再評価している。

第I篇の二つの章は、対象地域である横断山脈周辺に居住する主要な少数民族―チベット族、リス族、イ族、プミ族、ナシ族、ペー族―の特徴についての検討・分析である。これらの各少数民族に関して、実際に訪問して得られた資料なども多用して論じているという特色がみられる。また各少数民族は、従来基本的で正確な情報がほとんどなかった。その意味からも資料としての重要度が高い。なお、分析に際しては、少数民族の「住み分けモデル」、少数民族の「性格」がキーワードとして使用されている。

第II篇は本書の核心部分といえる。横断山脈南麓地域を代表する少数民族の生業形態である牧畜業（第3章）、塩づくり（第4章）、木地製作（第5・6章）の三項目について、それぞれの典型的な集落でのフィールドサーヴェイの成果を主たる内容としている。フィールドサーヴェイは短期間

ずつであったが現地での宿泊を伴ったものである。そのため内容が充実しており、具体的かつ詳細に論じられている。以上の三項目の調査に関しては、これまで報告されることがなく、先駆的な業績といえる。中でも、木地製作がこの地域で実施されていることは知られておらず、わが国においてほとんどみることが出来なくなった一人挽轆轤による木地製作の工程が確認できた。今後のわが国における木地屋（師）研究に新たな課題を提供したといえよう。なお、本書で生業形態を重視するのは、生業形態が生活の経済基盤とも称すべき下部構造の典型とみなされるからである。

二篇の付論は、研究対象地域にみられる生業形態以外の特徴を述べたもの、および対象地域ではなくその周辺に位置しているが、ほぼ同じ生業形態を基盤にしている少数民族との比較を行い、該当周辺地域の少数民族の特徴を考察したものである。これらの論考は、横断山脈に分布・居住する少数民族の特徴、筆者らがいう少数民族の「性格」をより明らかに印象付けている。

また冒頭のカラーの口絵写真は三二ページにも及び、横断山脈周辺に分布・居住する少数民族の状況を鮮明に描き出している。特に、海拔高度が四〇〇〇メートルを越える山道を通過しなければならぬなど、訪問することが非常に困難である

地域に関する写真であり、これらの写真だけでも大変貴重な資料といえる。

本書は、わが国の主要な大学図書館および研究機関の蔵書に加えられていると聞く。このことから、本書は横断山脈および中国の少数民族に興味や関心を有する研究者にとっては基本図書である。また若手研究者や学生にとっても地域調査の手引きとなろう。特に中国は、市場経済導入など近代化が急速に進展しているが、社会主義体制を堅持している。それゆえ、社会主義国家における少数民族調査は種々困難な問題が存在する。本書はこの点を克服する一つの方法を明示した好著といえる。

（おおよつ さなえ 歴史文化学科）